

みんなあつまれ！

「百羽のツル」で パフォーマンス

花岡大学生誕生110周年記念

メモリアルブック

いあいさ

花岡大学さんは、日本を代表する児童文学作家であり、今年、1909年2月6日に生まれた大学さんの生誕110年の記念の年にあたります。私どもは、大学さんの作品を後世に伝えていきたく、生誕110年という節目に代表作「百羽のツル」にスポットを当て記念行事を行いたいと考えました。お陰様で、奈良県より未来へつなぐ文化活動ステップアップ補助事業として採択いただき、『花岡大学生生誕110年記念 みんなあつまれ！「百羽のツル」でパフォーマンス』と題して、「百羽のツル」を五感で体感してもらうため5つのイベント、①いろいろなパターンの朗読、②十人十色の意見交換、③朗読にあわせ身体を動かすパフォーマンス、④動画絵本の製作、⑤大淀町生まれの知育ブロックで「ツル」のオブジェづくりを企画、実施いたしました。

作家であり、教育者であり、住職であった多忙な日々をおくる大学さんは、休むのも惜しみ執筆活動に励まれたそうです。

特に、僧侶という立場から仏教経典をもとに「仏典童話」という分野を確立された第一人者であります。大学さんの作品は、読み手一人ひとりに、この世に生を受けた者が生きとし生けるもののために何が必要なかを考えさせるものであります。時代は、日々混沌とし、SNS社会の歪みが露呈し、想定外ということが当たり前になりつつあります。そんな中でも、花岡童話は、いつの時代にも通じる「今一度立ち止まりもう少し深く考えてみなさい」と語りかけているものがあると思われまふ。ぜひ、大学さんの作品をもっと知っていただきたいと思う次第でございます。

最後になりましたが、花岡大学さんのご親族をはじめ、町民のみなさま等々、多大なご協力により今回の記念事業にいたしましたこと、改めてお礼申し上げます。

2019年11月末日

大淀町長 岡下守正

目次

みんなあつまれ！「百羽のツル」でパフォーマンス(写真)……	4
花岡大学略年譜……	6
ほとけのころとやさしいことば 花岡大学の世界……	7
花岡大学と佐名伝(写真)……	8
百羽のツル(書 西浦雪華)……	10
百羽のツル(絵 前田晃宏)……	18
百羽のツル(絵 おおよど語り部の会 駒谷ヨシコ)……	28
大淀町の伝説と昔話(大淀町史より)……	40
伝説……	41
①くすの木仏(比曾)	
②いかだのりの神様(増口)	
③おこり地蔵(北六田)	
④うまみち(馬佐)	
⑤安産の滝(田口)	
⑥金輪坂のきつねのほこら(奥越部)	
⑦つちんこへび(中越部)	

⑧御手植えのけやき(土田)	
⑨天皇社の杖さくら(桧垣本)	
⑩小金吾の墓(畑屋)	
⑪血のすえないひる(持尾)	
⑫愛宕山(矢走)	
⑬八幡さんのかずえ姫(芦原)	
⑭ひらはたの石塚(下淵)	
⑮こうらく谷のきつね	
⑯さかさ竹(銚立)	
⑰おたびら如来(大岩)	
⑱泉徳寺のてんぐ(今木)	
⑲ふしぎな井戸(薬水)	
⑳筆捨岩	
昔話……	52
⑳新聞記事……	60

2019年11月10日(日) ひだまりホール
「百羽のツル」を3つのパターンで朗読するよ。



朗読:朗読ボランティア「響」
手話朗読ボランティア



花岡大学展(11月17日~11月24日)

みんなあつまれ!
「百羽のツル」でパフォーマンス

2019年11月17日(日) ひだまりホール
「百羽のツル」でディベートしてみない?



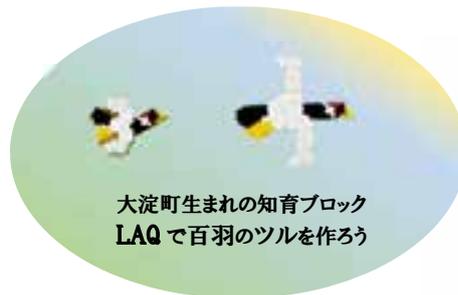
紙芝居:おおよど語り部の会
コーディネーター:川村優里



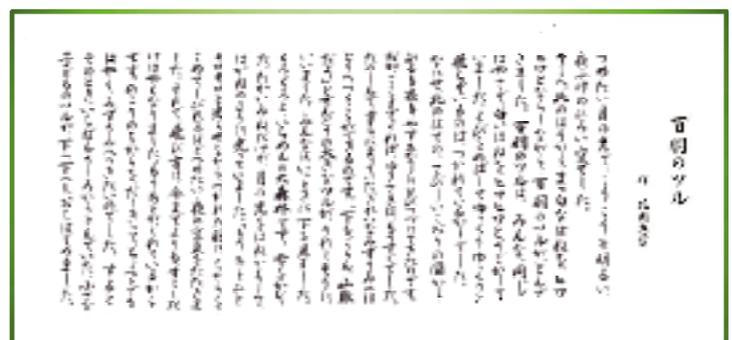
2019年11月24日(日) あらかしホール
 みんなで朗読劇〈ツルになってパフォーマンス〉



舞台協力:あらかしステージオペレータークラブ



大淀町生まれの知育ブロック
 LAQ で百羽のツルを作ろう



メモリアル動画(絵本)



『花岡大学略年譜』

- 一九〇九年(明治四二年)二月六日
大阪市で花岡大雄(父)、チク(母)の次男として生まれる。
命名「如是」(ユキヨシ)
- 一九一一年～一九二五年
吉野川の川沿いで幼年時代、少年時代を過ごす。
- 一九二七年～一九三三年
龍谷大学予科から文学部史学科に学ぶ。
- 一九三四年 大学を卒業。
本願寺で得度を受ける。「大岳」と改名し、僧籍に入る。
- 一九三五年～一九三六年
大阪府南河内郡天野小学校の代用教員となる。
- 一九三七年
この頃、童話作家連盟を結成し、同人雑誌「童話作家」を発行。
- 一九三七年
大阪布施第三小学校訓導として勤める。
- 司馬遼太郎さんの妻 福田みどりさん(旧姓 松見)を教える。
- 一九三八年
臨時召集を受け、奈良歩兵38連隊に入隊。
- この時、東大寺の清水公照師と親交を持ち、以後終生友人関係を保つ。
- 一九四〇年五月 天王寺中学校で教諭をする。
- 一九四二年四月 臨時召集を受け、中国を転戦する。
- 一九四六年 山口県仙崎港に復員。

- 一九四七年四月 奈良県立吉野女学校(大淀高校)に勤務。
- 一九四九年
「花ぬすつと」を百華苑より出版。棟方志功の装幀。
以後、活発な創作活動が行われる。(作品名は省略)
- 一九六〇年
「かたすみの満月」で小川未明奨励賞を受ける。
川村たかし氏らと同人雑誌「近畿児童文化」を発刊。
- 一九六一年一〇月
「ゆうやけ学校」で小学館文学賞を受ける。
- 一九六四年 勤めていた大淀高校を退職。
- 一〇月から京都女子大学の非常勤講師となる。
- 一九六六年
京都女子大学児童学科の助教授となり、龍谷大学、大谷大学の非常勤講師となる。
- 一九七二年四月 京都女子大学の教授となる。
- 一九七四年三月 京都女子大学を定年退職。
- 四月 奈良文化女子短大の教授となる。
- 一九七七年四月 第1回正力松太郎賞を受ける。
- 一九八〇年 西本願寺教学助成財団名誉総裁賞を受ける。
- 一九八六年
佐名伝の梨山に「花岡大学童話碑」が清水公照東大寺長老の揮毫を得て建立。
- 一九八八年一月二九日(七九才) 京都第一赤十字病院にて逝去。

ほとけのこころとやさしいことば

～花岡大学の世界～

花岡大学(1909～1988)は、大淀町が生んだ、偉大な文学者・郷土史家のひとりです。仏教をテーマにした童話作品を数多く生み出したことで、日本の児童文学史にもその名をとどめています。

花岡大学は、大淀町佐名伝の浄迎寺の住職を勤める父・大雄の次男として生まれましたが、僧籍に身をおきながらも文学の道を中心とせし、作家としての才能をみがきました。

青年から壮年の頃、次々と発表された文学作品は、創作童話を中心としたもので、各方面で好評となりました。京都女子大学での教授時代(1971年以降)は、児童文学者として学会を指導する立場にもありました。

また、地元の大淀高校で教師を務めるいっぼう、高校の歴史研究部の顧問をつとめ、吉野史談会をつくって文芸誌『吉野風土記』(1956～1968)を編集するなど、郷土史への関心も深めました。

このころから、民話や説話への関心が高まっていたのでしよう。1973年に刊行された『大淀町史』の「大淀町の伝説と昔話」の担当として、町内にのこっていた説話をまとめながら、仏教の始祖・ブツダの生前の物語「本生譚(ほんしようたん ジャータカ)」などの説話をもとにした「仏典童話」を書き始めます。

晩年は、これまでかかわってきたさまざまな組織・団体をしりぞき、個人雑誌『まゆーら』(まゆーらとはクジャクの事)の執筆と、これまでの作品集の刊行を意欲的につづけました。

1986年には、梨山がひろがる佐名伝の大阿太高原に、代表作「百羽のツル」の一節をきざんだ「童話碑」が、友人でもあった清水公照(元東大寺長老 1911～1999)の揮毫をえて建てられました。そして、その2年後の1988年、79歳の生涯をとおしました。

花岡大学の残したメッセージは、ひと言でいえば「ほとけのこころとやさしいことば」ということばで表現できるでしょう。

「ほとけのこころ(仏心)」は、自身も引用したことばで、仏教的な精神をもつ人の心をさします。このような心をもつ人を、彼は「仏教者」とよんでいます。彼自身がまさに「仏教者」だったのでしよう。「仏典童話」の名は、それゆえに彼の作品の代名詞となりました。

「やさしいことば」の「やさしい」には、ふたつの意味があります。ひとつは「易しい」の意味で、わかりやすく平易なことばで人につたえる、ということの大切さを示します。彼が童話とかたちを自身の文学表現として選んだのは、彼のメッセージをうまくつたえる「易しいことば」の表現法だったからでしょう。

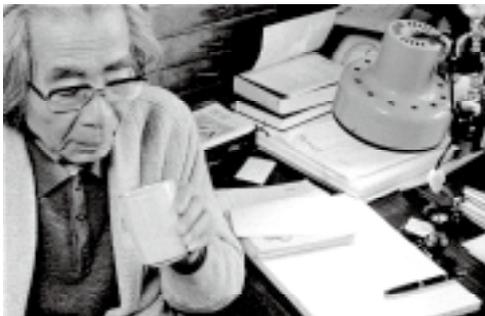
もうひとつは「優しい」の意味です。彼の作品には、どんな悪い人にも「仏の慈悲」がとどくという、浄土真宗の開祖・親鸞上人の思想がみとれます。「優しいことば」を用いることによつて、その感覚が作品を満たしてゆきます。

社会不安、人間不信におちいることの多い今の私たちにとつて、花岡童話のメッセージは、何かのヒントを与えてくれる気がします。

文責 松田度(大淀町教育委員会学芸員)



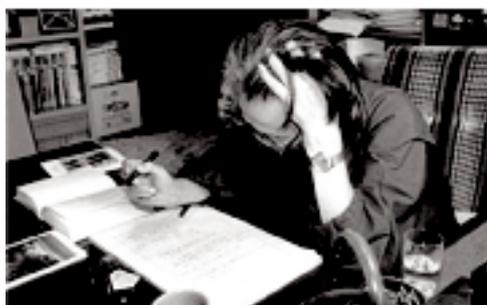
大波町下流方面より佐名岳を望む



浄迎寺(建替前)



おいの池
(吉野川護岸工事により現在はありません。)



ひやうは

百羽のツル

作 花岡大宇

書 西浦雪華

つめたい月の光で、いっとうと明るいつ
夜ふけのひろい空であった。

そとへ、北のほうから、まっ白なはねを、ヒワ
ヒワとならりながら、百羽のツルがととて
きました。百羽のツルは、みんな同じ
はちやと、白いはねを、ヒワヒワとうごかして
いました。くびをのばして、ゆっくうゆっくうと
飛んでいるのは、つかれているからでした。
なにせ、北のはての、さびしい、おりの国から

ふるも夜も、すすみながしにびりびりけさめたのです。
だが、いんげんがへんば、ゆかたをはもうすぐでした。
たのしんでおらにまつて、たぐれなみずうみのほ
とくしていんげんがへんばのす。下をいんげん山脈
だよ。」とせんどうの大まなツルがうれーそうに
いきました。みんなはいつとまに下を見ました。
くろぐろと、いらめんの大森林です。雪まがどっ
た、たかいみねだけが、月の光をはねかきして
はがねのように光るまじりました。「もうあとひと

「まだ。みんなが眠ればよい。百羽のツルは、目を
キラキラと光らせながら、つかれた羽に、ちかちかを
こめて、いびれるほどつめたい夜の空気をたたきま
した。それで、飛び方は、今までよりもすこーだ
けはやくなりました。もうあとが、いれているから
です。このうちからを、だーまっつて、ちかちかでも
はやくいびずうみ入つきたいのでーた。すると
そのおまへ、うはんうーみちちとんで、いっせ、おまへ
子どものツルが、下へ下へと、おまへは、いっせ、おまへ、

こころだ〜なからったからです。だまっして〜ら〜ら
おぼろげなガウラ〜はガウラ〜ガウラ〜ガウラ〜ガウラ〜
ま〜ま〜た。子どもものツルのおらるるの〜を〜に〜
の〜ま〜と〜いたツルがする〜
する〜たら〜たい〜
ま〜と〜九十九羽のツルが〜
下〜は〜です。子〜の〜
か〜の〜
な〜な〜

ツルを、おいぬくとくろくろとつづく、大森林の
まよあたりで、九十九羽のツルは、さつとはねを
くんで、つらまいの白いあみと、なつたのぞいた。

すばらしい九十九羽のツルのまよくげには、まよとに
あみの上に、子どもものツルをうけとあると、そのまよ
空へ、まよあがりました。気をうーなつた子ども
ツルを、ながい足でかかえ、たせんようのツルは、な
ごともなかつたかのように、みんなは、いまいた。「さあ、
もよのよよへ、並んで、飛んで、いよう。もうすくた。

が「はなはな」。さういふとあかからん夜ふけの
空を自問のツルはまっしうなはなをさう
えてとつとつと空のあなたうーだんははは
ちんちんまーた。

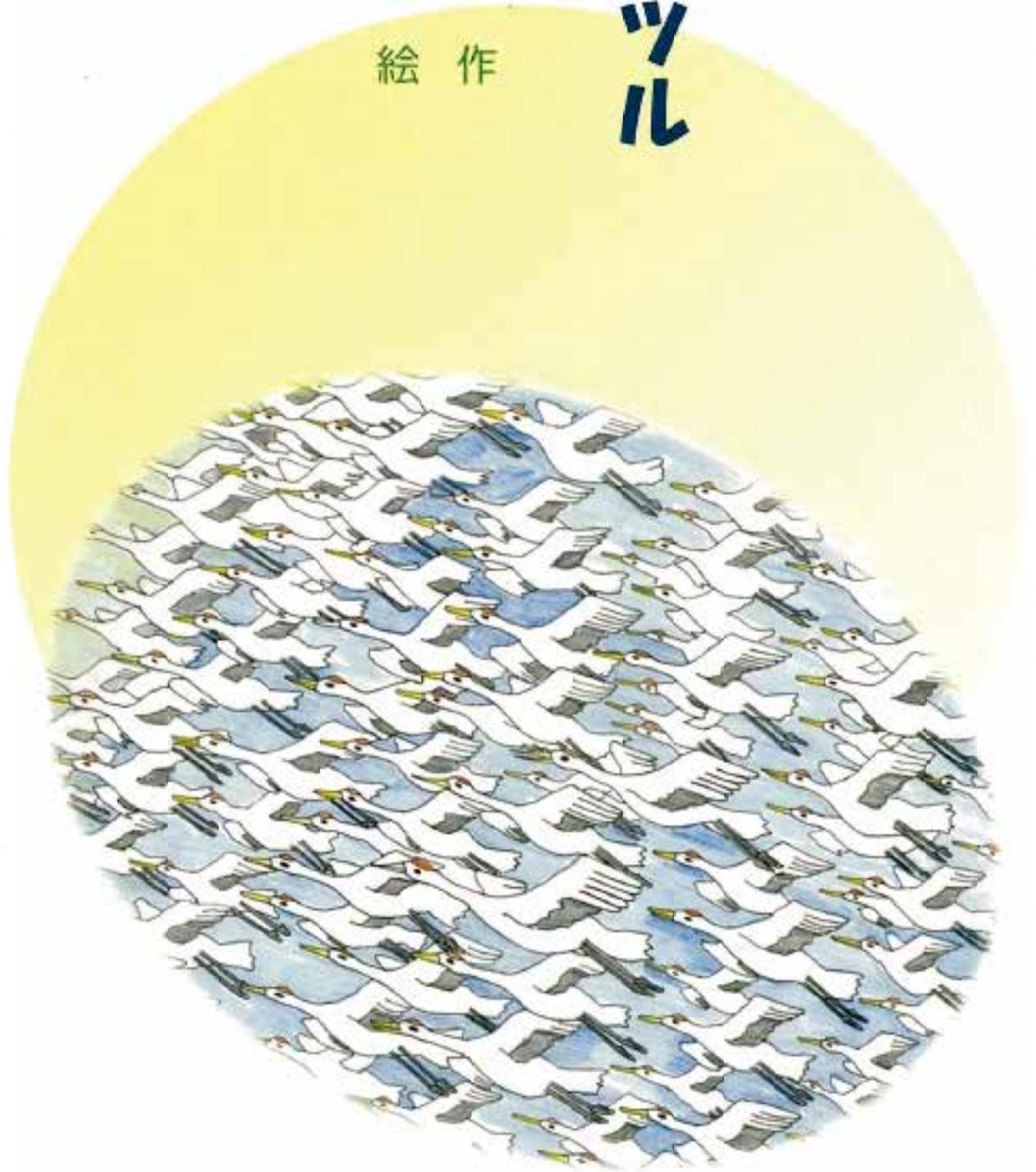
百羽のツル

花岡大学

作

前田晃宏

絵





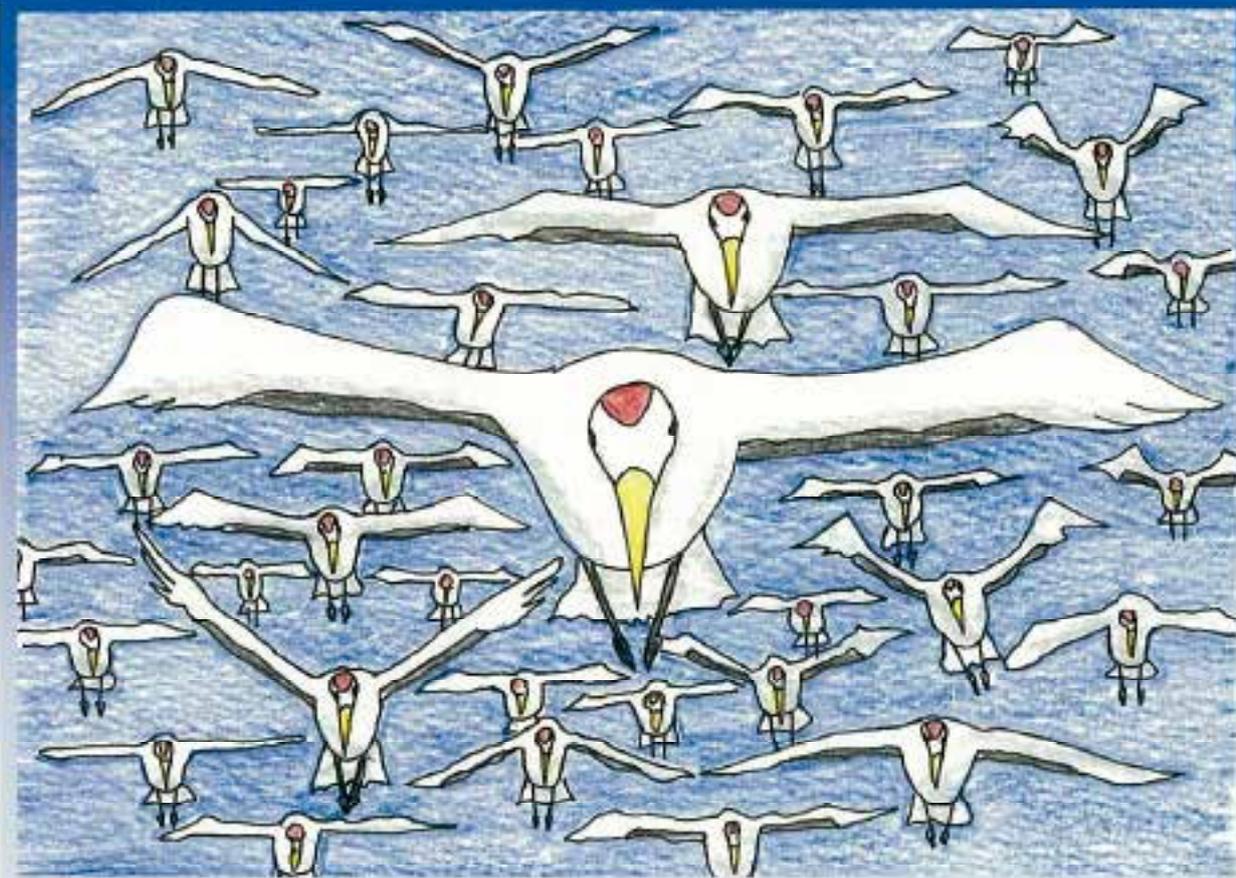
冷たい月の光で、こうこうと明るい、
夜更けのひろい空でした。

そこへ、北の方から、真っ白な羽を、
トワトワとならしながら、百羽のツルが、
飛んできました。

百羽のツルは、みんな、同じ速さで、白い羽を、
トワトワと、動かしていました。

首をのぼして、ゆっくりゆっくりと、
飛んでいるのは、疲れているからでした。

なにせ、北の果ての、
さびしいこおりの国から、昼も夜も、
休みなしに、飛び続けてきたのです。
だが、ここまで来れば、
行き先は、もうすぐでした。
楽しんで、
待ちに待っていた、きれいな湖のほとりへ、
着くことができるのです。





「下をいぶん、山脈だよ。」と、

先頭の大きなツルが、

嬉しそうに、言いました。

みんなは、いっときに、下を見ました。

黒々と、いちめんの大森林です

雪をかぶった、高い峯だけが、

月の光をはねかえして、

はがねのように、光っていました。

「もう、あとひとときだ。

みんな、がんばれよ。」

百羽のツルは、目を、キロキロと光らせながら、
疲れた羽に、力を込めて、しびれるほど冷たい、
夜の空気をたたきました。

それで、飛び方は、今までよりも、
少しだけ、速くなりました。

もう、あとが、しれているからです。

残りの力を、出さきって、

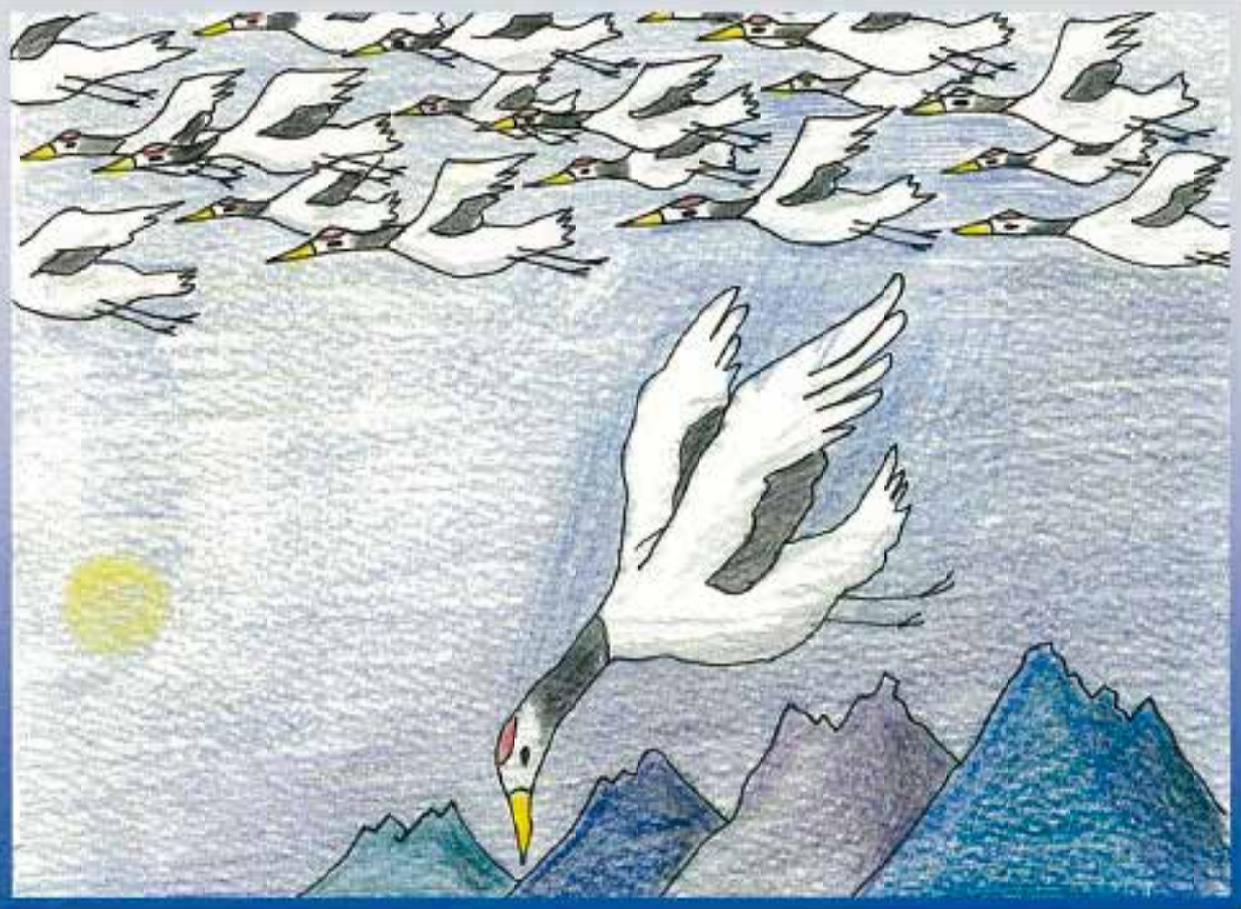
ちょっとでも早く、湖へ着きたいのです。

するとその時、一番後ろから飛んでいた、

小さな子どもツルが、

下へ下へと、おち始めました。





子どものツルは、みんなに、内緒にしていたが、病気だったのです。

ついまでついてくるのも、やっとでした。

みんなが、少しばかり速く飛び始めたので、

子どものツルは、ついていけなくなって、

死にもの狂いで、飛びました。

それが、いけなかったのです。

あっという間に、羽が、動かなくなってしまい、

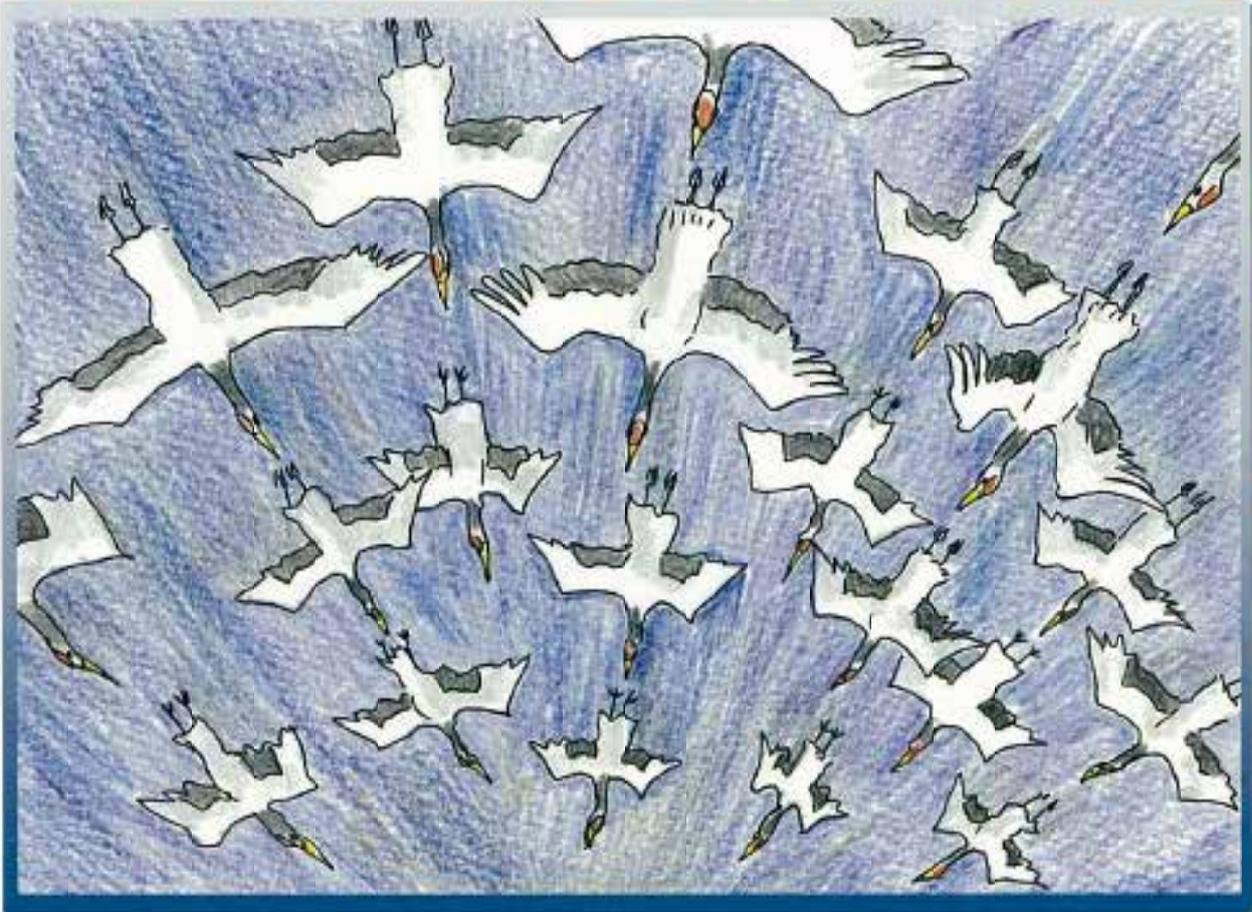
吸い込まれるように、下へおち始めました。

だが、子どものツルは、みんなに、

助けを求めようとは、思いませんでした。

もうすぐだと、喜んでいる、みんなの喜びを、

嬉しさを分かっていたからです。



黙って、グイグイとおちながら、小さなツルは、
やがて、気を失ってしまいました。

子どもツルのおちるのをみつけて、

そのすぐ前を飛んでいたツルが、鋭く鳴きました。
すると、たちまち、大変なことが起こりました。

前を飛んでいた、九十九羽のツルが、いっときに、
さっと、下へ下へとおち始めたのです。

子どものツルよりも、もっと速く、

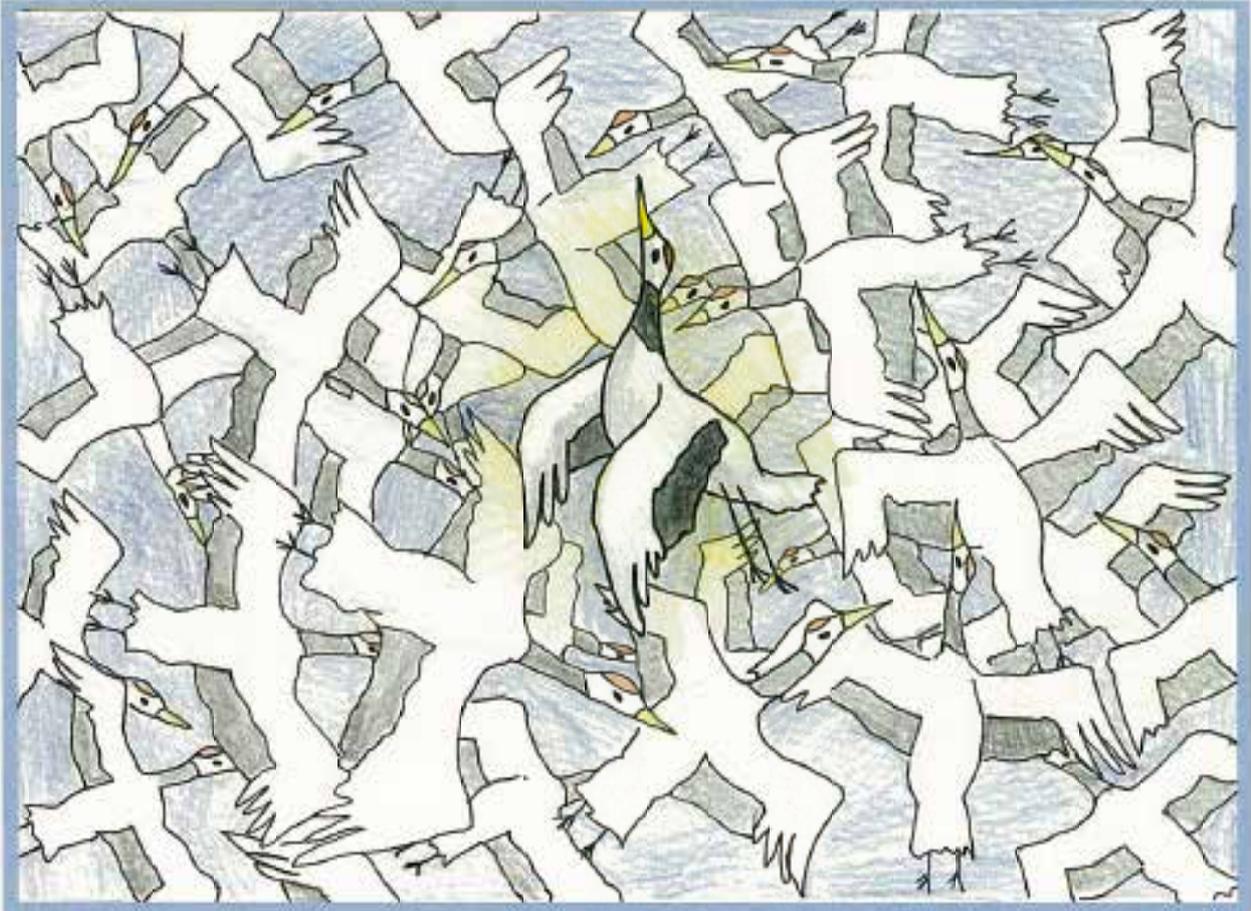
月の光をつらぬいて飛ぶ、銀色の矢のように速く、

おちました。そして、おちていく子どものツルを、

追い抜くと、黒々と続く、大森林のまあたりで、

九十九羽のツルは、さっと羽を組んで、

一枚の白い網となったのでした。





すばらしい九十九羽のツルの曲芸は、

見事に、網の上に、子どものツルを受け止めると、

そのまま空へ、舞い上がりました。

気を失った、子どものツルを、

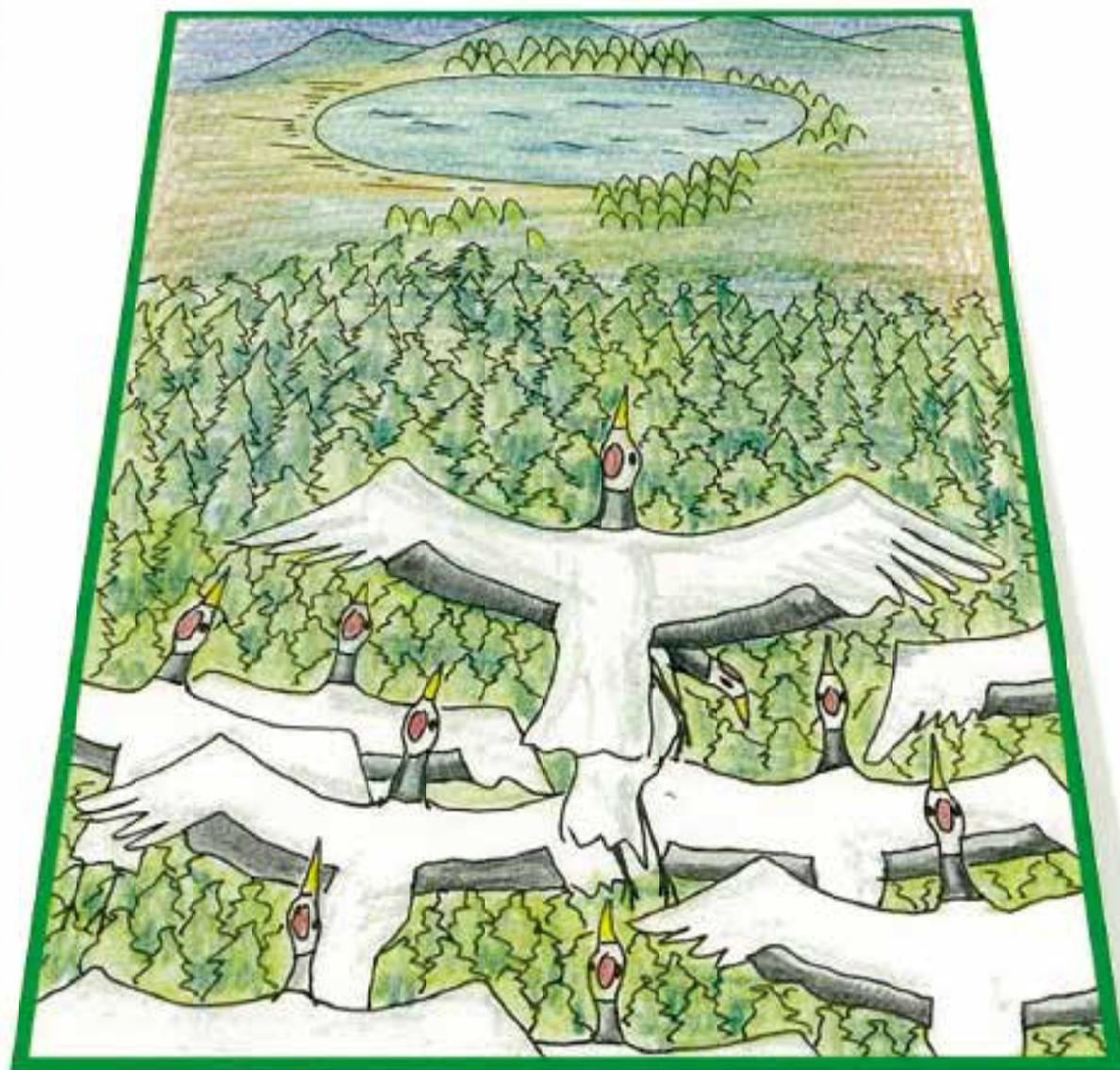
長い足でかかえた先頭のツルは、

何事もなかったかのように、みんなに、言いました。

「さあ、もとのように並んで、飛んでいこう。

もうすぐだ。がんばれよ。」

じつじつと明るい、夜更けの空を
百羽のツルは、真っ白な羽をそろえて、
トフトフと、空の彼方へ、
次第に小さく消えていきました。



百羽のツル



花岡大学 作

おおよど語り部の会が紙芝居として戸田幸四郎さんの絵本を参考に制作されたものです。

絵：駒谷ヨシコ



つめたい月の光で、
こうこうとあかるい、
夜ふけのひろい空でした。



そこへ、北のほうから、まっ白なはねを、
ヒワヒワとならしながら、百羽のツルが、
とんできました。

百羽のツルは、みんな、同じはやきで、白
いはねを、ヒワヒワと、うごかしていまし
た。くびをのばして、ゆっくりゆっくりと、
飛んでいるのは、つかれているからでした。
なにせ、北のはての、さびしいこおりの国
から、ひるも夜も、やすみなしに、とびつ
づけてきたのです。だが、ここまですれば、
ゆきさきは、もうすぐでした。たのしんで、
まちにまっていた、きれいなみずうみのほ
とりへ、つくことができます。



「下をごらん、山脈だよ。」

と、せんとうの大きなツルが、うれしそうに、いいました。

みんなは、いつとくに、下を見ました。

くろぐろと、いちめんの大森林です。

雪をかむった、たかいみねだけが、月の光をはねかえして、はがねのように、光って
いました。



「もう、あとひといきだ。みんな、がんばれよ。」

百羽のツルは、目を、キロキロと光らせながら、つかれた羽に、ちからをこめて、しびれるほどつめたい、夜の空気をたたきましました。

それで、飛び方は、今までよりも、すこしだけ、はやくなりました。

もう、あとが、しれているからです。

のこりのちからを、だしきって、ちよつとでもはやく、みずうみへつきたいのでした。



するとそのとき、いちばんうしろからとんでいた、小さな子どものツルが、下へ下へと、おちはじめました。

子どものツルは、みんなに、ないしょにしていたのですが、びようきだったのです。

ここまでついてくるのも、やっとでした。

みんなが、すこしばかりはやくとびはじめたので、子どものツルは、ついていこうとして、しにもものぐるいで、とびました。

それが、いけなかったのです。



あつというまに、はねが、うごかなくなっ
てしまい、すいこまれるように、下へおち
始めました。

だが、子どものツルは、みんなに、たすけ
をもとめようとは、おもいませんでした。
もうすぐだと、よろこんでいる、みんなの
よろこびを、こわしたくなかったからです。
だまって、ぐいぐいとおちながら、小さな
ツルは、やがて気をうしなってしまいました
た。



子どものツルのおちるのをみつけて、そのすぐまえをとんでいたツルが、するどくなきました。

すると、たちまち、たいへんなことがおこりました。

まえをとんでいた、九十九羽のツルが、いっどきに、さっと、下へ下へとおちはじめたのです。子どものツルよりも、もっとはやく、月の光をつらぬいてとぶ、ぎんいろの矢のようにはやく、おちました。



そして、おちていく子どものツルを、おいぬくと、くろぐろとつづく、大森林のま上あたりで、九十九羽のツルは、さっとはねをくんで、いちまいの白いあみとなったのでした。

すばらしい九十九羽のツルのきよくげいは、みごとに、あみの上に、子どものツルをうけとめると、そのまま空へ、まいあがりました。



気をうしなった、子どものツルを、ながい
足でかかえた、せんとうのツルは、なにご
ともなかったかのように、みんなに、いい
ました。

「さあ、もとのように並んで、飛んでいこ
う。もうすぐだ。がんばれよ。」



こうこうとあかるい、夜ふけの空を百羽の
ツルは、まっしろなはねを、そろえて、ヒ
ワヒワと、空のかなたへ、しだいに小さく
きえていきました。

大淀町の伝説と昔話



〈大淀町史より〉

【伝説】

- ①くすの木仏(比曾)
- ②いかだのりの神様(増口)
- ③おこり地蔵(北六田)
- ④うまみち(馬佐)
- ⑤安産の滝(田口)
- ⑥金輪坂のきつねのほころ(奥越部)
- ⑦つちんこへび(中越部)
- ⑧御手植えのけやき(土田)
- ⑨天皇社の杖さくら(桧垣本)
- ⑩小金吾の墓(畑屋)
- ⑪血のすえないひる(持尾)
- ⑫愛宕山(矢走)
- ⑬八幡さんのかずえ姫(芦原)
- ⑭ひらはたの石塚(下淵)
- ⑮こうらく谷のきつね(岩壺)
- ⑯さかさ竹(銚立)
- ⑰おたびら如来(大岩)
- ⑱泉徳寺のてんぐ(今木)
- ⑲ふしぎな井戸(薬水)
- ⑳筆捨岩(佐名伝)

【昔話】

- ㉑ほととぎすのなきこえ(芦原)
- ㉒ぬすつととお地蔵さん(岩壺)
- ㉓きつねつきばあさん(今木)
- ㉔おいの池の話(佐名伝)

①くすの木仏（比曽）

欽明天皇のころ、難波の海辺で、のちの河内国泉北郡茅渟（ちぬ）の海に、一本のふしぎな木がただよっていた。その木は、日輪をあざむくほどに、光りかがやいていたというのである。

天皇は、そのうわさをきかされると、すぐに、溝辺の直（あたい）にいつけて、それをしらべさせた。

直（あたい）は、海には行ってそれをみると、光っているのはくすの木であることにまちがいはなかった。その由を天皇に報告した。しかしいづれにしろ、そんな光りかがやく木はめずらしく、天皇は漁師にいつけてそれを拾い上げ、仏工に命じて二つの仏像をきざませた。

すばらしくりっぱな、光りかがやく仏像ができあがったので、その一体を聖徳太子の開基にかかる比曽の世尊寺に、安置させた。

これがわが国における仏像彫刻の最初の仏であり、しかも常にまばゆいばかりに光りをはなっていたので、それにちなんで世尊寺のことを、現光寺ともよぶようになったといわれている。



ひそのかんのんさま

②いかだのりの神さま（増口）

増口の樁井の森に、まつられているのは、水分神社であるが、その神さまは、とくにいかだのりの神さまとして、あがめられていた。

いかだのりというのは、今はまったくなくなつたが、材木をいかだにくんで、それを下流に流していく仕事をする人のことである。

吉野の材木も、おもにいかだによつて下流へ運ばれたのだが、ちょうど神社のあるま下あたりの吉野川は、はげしい流れが岩をかんて流れているところ。いかだのりの難所といわれていた。毎年事故がおこつて、死者や負傷者がでた。

そこでいかだのりたちが、いろいろ相談のすえ、自分たちをまもつてくれる神さまとして、高さ六十一段、幅四メートルもある扁状の石英安山岩の石段を献納した。明和四年（一七六七）のことである。それからのち事故がまったくなくなつたといふので、いよいよいかだのりたちから、自分たちの神さまとして、あがめられたといふことである。



③おこり地蔵(北六田)

北六田の、国道一六九号線にそってまつられている地蔵さんを、下の地蔵という。

むかしは、さくらの木も植えられていて、なかなかいい場所だったらしいが、今はさくらもなく、道はたで車のほこりをあびせかけられている。

そんなせいではなからうが、この地蔵さんは、以前からだいぶかわった地蔵さんとして知られている。

こんな話が伝えられている。

だいぶ前に、みよしたはんといひうらぶら遊んでゐる、なまくらな若い男がいた。

この男は、お地蔵さんなどをばかにして、「そんなもん、ばちなんか、よらあてるもんかいな。」といひつて、わざわざお地蔵さんの前へいひつて

「プ」

と、屁をかましたのだそうである。

するといつにもこにこ笑い顔をしている。この地蔵さんが、こわい顔になつて、ふん。ふん怒りだし、

「よし、ばちをあててやる」

といったかと思うと、みよしたはんは、たちまち足がたたなくなり、おまけに石垣の上からころげおちたりして、大けがをした。

そこでみよしたはんの両親は、びっくりして、お地蔵さんの前へとへてくると、

「どうか、息子のやつをゆるしてくださいませ。これからは、まうと心を入れかえさせますし、いねいにおまつりをさせてもらいますから、かんんしてやつてくださいませ。」

といて平あやまりにあやまったので、やつとゆるしてもらえたという。

八月二十四日は、地蔵盆で、垣内ごとに米をあつめてもちをついて、おそなえし、その他のおそなえものといひしよに、こどもたちに与える行事は今につづいているが、おこらせつてひびくめにあうといひうので、みよしたはんのようないざらは、こわがつただれもようしないといひうことである。





④うまみち（馬佐）

むかし太閤秀吉が、馬佐峠のちかくで、馬をたくさんつれてきて、演習をしていたそうである。

演習がおわつて、いざかえろうとすると、馬が一頭たりない。

それでみんなであちこちとさがしたが、なかなかみつからなかった。

さんざんさがしたあげく、その一頭が、一つの谷のどんづまりのところにいるのが、やっとみつかつて、馬さがしがおわつた。そこでそのことが、小字の地名の起りになるわけであるが、今でもその谷のどんづまりと、そこをとりまわっているまわりの山々のことを、うまみちと呼ぶところである。

⑤安産の滝（田口）

田口垣内から、壺阪街道をすこし北にすすんだところに、この附近の人たちから「安産の滝」と呼ばれている滝がある。

しげった木々のあいだにかかっているちいさな滝で、今は以前ほどの水量ももっていないが、この滝はむかしから、産をするものがその滝水にうたれと、安産をするといういい伝えによつて名高く、今はそういうことをする人はいないが、素朴にそのことを信じて滝に打たれているむかしの産婦のすがたが、なにかゆかしくしのばれる。



⑥金輪坂のきつねのほころ (奥越部)

奥越部から、畑屋のみやんたににめける道に、金輪坂があり、その坂の上いきつねのほころがある。

むかし、そのあたりに、古い大きな松の木があったのを、村の人たちは、なんの気なしにきりたおした。

ところがその晩から、きつねがさわがしくなきたてて、村の人たちは、まじりともねむれなかった。それで村の人たちは、あの古い松の木は、きつねの住居だったにちがいない、これは悪いことをしたと思ひ、あくる日すぐに新しい松の木を植え、おわびのしるしにたてたのが、このほころだといわれている。

なお、ほころの横にまつられている地蔵さんは金輪の地蔵さんといひ、歯痛、頭痛をなおしてくれるといひ、おまいりが絶えない。



⑦つちんこへび (中越部)

中越部に、うめのきだにというところがある。

ここはもと、雑木の生いしげった山であったが、あるとき、村の人がここを通りかかると、まるでつちんこ木槌のようなへびが、このところをりおちてくるのをみたそうである。

そしてその人は、ただみたというだけで高い熱をだし、二日ほど寝こんでしまったということである。

それは、八月か九月のことであったので、そのころにはそこにつちんこへびがいるというので、村の人たちはだれも近づこうともしなかったという。



⑧ 御手植えのけやき（土田）

吉野川の北岸土田の川近くに、その周囲二五メートル、高さが二〇メートル、枝のひろがりが三五メートル四方といわれる、けやきの大木がそびえたっている。

むかし神功皇后が、三韓征伐をして凱旋されてきたところに、大和平野の方には、きれいな水がすくなかったので、吉野川の水をひいてのみ水とされた。そしてその記念として御手植えされたのが、このけやきだといいつたえられている。

木の下には、住吉神社のほこらがあつて、畝傍の山口神社の祭典のときには、この水をほこんでいって、御神水にするならわしになつていたという。



けやきしい

⑨ 天皇社の杖さくら（松垣本）

松垣本に、天皇社という社がある。

これは、後醍醐天皇が、延元三年（一三三二）三月、八幡宮に御礼拝になったとき、ここに行在所がもうけられたところで、それをもとにして、後醍醐天皇を祭神として創建されたのが、この神社だといわれている。

その社殿のかたわらに、古い大きなさくらの木がある。

これは、このときに天皇がたずさえてこられたさくらの杖を、土にたてられたところが、それが芽をふいて成育したものだといえられ、今に杖さくらと呼ばれている。



⑩ 小金吾の墓（畑屋）

畑屋口の田の中に、五、六本のならの木があつて、その木かげに「小金吾の墓」として、ちいさな石が立っている。

源平のころ、平清盛の孫維盛（これもり）が、敗戦の身を下市のすし屋に
よせていたとき、その家臣として従つてきていた小金吾は、平家の衰運を悲
しみ、ついにこの場所で、自害してはたと伝えられている。村の人たちは、
それをあわれみ、この墓を建てて今に供養している。

「このあたりを「きんごちよ」と呼んでいる。



こきんごくん

⑪ 血のすえないひる（持尾）

壺阪寺へでようとして、弘法大師が持尾を通つておられるときのことであつた。

のどがかわいたので、したたり落ちる水を両手でうけとめてのんでみると、いつのまにか一ぴきのひるが、口にひっぱりついていた。弘法大師は、たいへんおつて、そのひるをとると、血をすおうとしていたその口を、ぎゅつとひねつてしまったということである。それからのち、このあたりのひるは、ゆがんだ口になってしまった。血をすうことができなくなったのだといわれている。

なお、おなじ弘法大師の話として、今ひとつ、大師がやはりこの土地を通りかかったときに、えんどうが食べたくなつたので、そのことを村の人たちにたのんだ。

ところが村の人たちは、だれもその大師の願いを入れて、えんどうを与えらるるものがいかなかった。

そんなことがあつてから持尾では、えんどう作りはできるけれども、ずつと不作がつづくことになつたのだと、いふ伝えられている。

⑫ 愛宕山（矢走）

矢走という地名は、矢を作っていたところとしての矢合（やあせ）からであり、しかもこの地が、しばしば戦場になって矢が走るという意味から、矢走（やばせ）になったといわれている。戦場であった名残りとして、今も小字に、まどぼ、しんがいくぼ、ばばさん、もんした、なまやしきなどというのが残っている。

矢走にある愛宕山には、南北朝時代には城が築かれており、とくにここは、金剛山にあがったのろしを、吉野に伝える中継地点として、大きな役割をはたしていたといわれている。

現在その山頂のところを、てんしゅかくと呼ばれ、一段低いところをたいらといつて、そこが屋敷跡だといわれている。

その山頂には、杉、松、藤などが生いしげっていて、地蔵さんのちいさなほころがまつられており、地蔵盆にはいねいなおまつりをして、村の人たちから敬信されている。



⑬ 八幡さんのかずえ姫（菅原）

菅原の小字で、八幡さんと呼ばれる小高い山がある。

むかし、そのあたりに、かずえ姫というたいへん美しい娘がいたが、かわいそうに生れながらひとこともものがいえなかった。その娘の父親は、そういうこともだけにふびんでならず、「かずえ姫、かずえ姫。」

といつてかわいがっていたが、その不幸な娘は、ふとした病気にかかり、ついになくなってしまった。

父親のなげきは、はたのみるめも気のどくであったが、それからまもなくその父親は、正覚寺（浄土宗）へ、鐘をつくつて寄進した。

そして鐘供養のときに、集ってきた村の人たちに、涙ながらにその父親は、「この鐘の音を聞いたら、かずえ姫がみんなにものをいっている声だと思っておくれ。」

といったので、それを聞いたみんなは、親の深いなげけに泣かされたという。以前の八幡さんというところには、彼岸さくらやもみじの木が、たくさん植っていて、きれいなかずえ姫のすがたがしのばれる、かつこの場所であったそうである。

⑭ひらはたの石塚（下澗）

下澗の北方の丘陵にひらはたというところがあり、その峠のいただきに、

高さ約五メートル、周囲約二〇メートルばかりの大きな石塚があり、通称これを「ひらはたの石塚」といっている。

ちいさいのでごぶごぶらしい、大きいので頭ぐらしいの無数の石塊を、ピラミッド形につみあげ、その頂上にもみの小木が一本植えられている。

この道は、吉野口、今木方面から、下澗、下市へ越えてくる旧街道で、大峯山におまいりをする修験道の行者たちは、千石橋を渡って下市から洞川へはいるか、または吉野川沿いにさかのぼり、柳ノ渡をわたって吉野山を経て山上へいくかのいずれかの道をとったが、いずれもこの峠を越えたので、むかしはかなりにぎわい、頂上には茶屋もあった。

ここまできると、大台、大峯の諸山が一望のうちに眺められるので、行者たちはここを第一の行場として、身を正し旅の安全を祈願した。

そしてこのあたりは、岩塊が多くて歩きにくい山道であったところから、いつのころからか行者たちは、その石ころを拾ってそれを頂上へはこんで石塚をつくるのが、是非しなければならぬ信仰行事として習慣化される

ようになって、今のような石塚がつくられたというわけである。

交通機関の変遷によつて、今はこの道を通る人のすがたはまったく絶え、生いしげる雑草に埋れてしまっているありさまであるが、それだけに、そういうなかに残されている信仰遺跡をみると、よけいにゆかしく先祖たちの心が偲ばれる。

なお、かつてその石を、持ちかえつて家の礎石にした者がいたが、その人たちはまち重病にかかったばかりでなく、家運も衰退したというようないい伝えがあり、今はだれもそれにさわるうともしない。

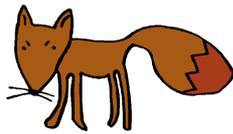
⑮ごうらく谷のきつね (岩壺)

岩壺から鋒立にぬける谷を、ごうらく谷という。この道のなかほどに、くろ岩という大きな岩があった。

このあたりをひらはたの人が、通りかかったが、気がついてみると、くろ岩のまわりをぐるぐるまわっていて、どうしても前へすすむことができなかった。それで馬からおりて、通っていくと、やっと通りぬけることができた。

それは、くろ岩のあたりに、ばかす力のある古いきつねがすんでいて、えらそうに馬にのって通ることをゆるさないからだといわれた。

そんなことがあつてから、ここを馬で通る者は、かならず馬からおりて通るようになったといふことである。



⑯さかさ竹 (鋒立)

鋒立の清九郎さんといえば、日本国中に名前のきこえた、たいへん名高い妙好人(信心深い人)で、ありがたい話が、いろいろと伝えられている。

本願寺のおつぱんさん御仏飯をたくまぎをせおつて、京都まで死ぬまではびつづけたというのもそのひとつだが、あるとき木津川までくると、大水がでていて川を渡ることができなかった。

ところが、清九郎さんが念仏をとえながら川をわたろうとすると、ふしぎなことに清九郎さんの歩くところだけ水が二つにわれて道をつくり、難なく向こう岸へつこうことができたということなど、だれにでも知られている話である。

ところでそのときいつも使っていた竹の杖だが、清九郎さんがなくなつてからのち、それを墓の上にたてておくと、いつのまにか新芽がでて育つていった。

そのとき杖は、さかさにたてられていたので、その杖はみんな下向きにでていたといふことである。

今も高市郡丹生谷の因光寺というお寺の境内には、みんな下向きになった枝をしげらせているこの竹の一むらが、やぶになつていっているといふ。

⑰ おたびら如来（大岩）

大岩の氏神さんである八幡神社の

入口に、大日如来をおまつりしてあるお堂がある。

そのお堂のなかには、大きな大日如来と、小さな大日如来とが、おまつりしてある。



だいにちさん

ところでその小さい方の大日如来は、あるとき近くの丹生谷鎮の山の中で、みつかつてお堂へつれてきたものであるが、これは天からおりてこられたものにちがいないといわれ、しかも山の中におちていたあとには、おたびら（あぐら）をかいていたような、水たまりのどろどろのあとがあったといひ伝えられている。

そんなことからいつからとはなしに、この小さい方の大日如来は、雨乞いの仏さまだとごうごうごうとなり、ひでりがついたりするときは、村の人たちによつてもちだされ、「あめたんもれ、池も川もかんからや」と大声でさげびながら、小さい大日如来が、おたびらをかいておまつりしたごうごうつれていった。

そして、鐘や太鼓をさわがしくうちならして、「あめたんもれ」をくりかえし、そのあともつていった大日如来と、おたびらをかいていた水たまりの水と、どろどろのどろどろをいっしょにもちかえり、大日堂のお堂の屋根へ、そのどろをきたならしくなすりつけるのだそうである。そうするとまもなく、うなるような雨がふってきたといわれている。

⑱ 泉徳寺のてんぐ（今木）

今木の泉徳寺は、真言宗の寺であるが、この寺の



仁王門には、てんぐがいるといわれている。

そのてんぐは、堺の大寺から一晩のうちに飛んできたもので、そのとき仁王門の仁王さんを、二体ともたずなでちよつてきたごうごうごうである。

村の下手垣内の西の方に、てんぐ森と称する、うっそうとしてげった森があるが、その名前からいって、泉徳寺にいててんぐの、じつぎに住まっていた場所は、その森だったのかもしれない。

⑱ ふしぎな井戸（薬水）

薬水に、ふしぎな井戸がある。



弘法大師が、宇陀の室生寺と高野山のあいだをゆきまきしていたころ、あるときこの村を通りかかると、村の人たちが大ぜい疫病にかかってこまづいてるのを見てあわれに思い、このふしぎな井戸を、教えてくれたという。村の病人たちがその水をのむと、病気がたちまちなおってしまった。うわさはすぐに、四方にひろまり、たくさんな病人がその水をのんでたすけてもらった。それでそのかたわらに、大師堂も建立されたほどであった。

ところがそのち、無信の人が、この水で米をといいたり、むつきを洗ったりなどしたので、そのあたりをうけて失明してしまったようなことがあった。それからというものは、人々はこの水をこわがって、ちかよらなくなってしまうた。

大師堂は、明治のはじめにこわされてしまったのこっていないが、そのふしぎな井戸といわれるものは、民家の敷地内に現存している。

薬水という地名は、こういふ伝説からつけられていることは、いうまでもない。

⑳ 筆捨岩（佐名伝）

佐名伝の南を流れる吉野川の清流のなかに、ふしぎなかたち、おもしろいかたちをした奇岩がしよう立して、ひとつの巨大な島をなしている景色のすばらしくいいところがある。

大水がでるたびに、その奇岩がくずれたり流されたりして、おもしろさ、うつくしさはすくなくなっているが、それでも現存しており、村の人たちはこれを「筆捨岩」と呼んでいる。むかし、巨勢の金岡が佐名伝を通りかかってこの景色をみて心打たれ、これを絵にかきとどめておきたいと考えて、村に足をとどめて毎日写生にかけた。

ところがいくたびに奇岩はそのすがたを変えているため、かきあらためねばならず、数日そいうことをくりかえしたが、いつもいつもかきなおしばかりで、どうしても絵を完成することができず、ついに筆を捨てて村を去ったといういい伝えから、その呼び名があるわけである。

岩が日々そのすがたを変えるとみられるほどに、そのころの奇岩の風景が、おそらく見事なものであったにちがいない。この伝承がそれを語っており、その面影は今にのこっている。

② ほととぎすのなまぎ(昔原)

あるところにな、ほととぎすの兄弟がおつてんと。ところがふとしたところから、兄の方がな、重い病気にかかつて、ねこんでもたんやつて。そいで兄さん思いの弟のほととぎすは、えらい心配して、どないしてはよようなつてならおうと思つていたところが、やまのいもを食べさせたらええときいたんぞ、さうぞく山に入つてほつてきて、ええところばかり食べさせたそうな。なんへんもそないして食べさせておつたら、それがきいたんか、兄のほととぎすは、やつと重い病気がなおつたそうな。

病気がなおると、兄のほととぎすは、「おれの病気のあいだ、弟はやまのいものうまいとほつかり食べさせてくれよつたが、ひよつとしたらもつとやまいとがあつて、あいつはそれを食べつたもんにながいない。いったいなに食べてよつたものか、みたいもんや。」

と、思つてな、よくねむつてた弟をひつとつて、殺してしもたんやつて。ひつとつてする兄さんやな。鬼みたいなやつちゃ。

それからな、その兄のほととぎすは、弟の腹をきつてしらべてみたんやつて。そしたら弟の腹のなかからどきたもんは、もつとやまいとところどころか、やまのいものひげとほのまがいところばかりやつたそうな。それをみた鬼みたいな兄のほととぎすも、

「ああ、そやつたのか。お前はおれの病気をなおしてくれようとして、んなまがいもんをたべて、しんぼつしよつてくれたんか。そやのにうたつて、お前を殺したりして、すまんすまん。」

ちゆうてな、なみだをこぼしてあやまつたそうな。おそくさいわ。なんぼあやまつても、心のやさしい死んだ弟は、もうかえつてきやせんわ。

さあ、そんなことがあつてからや。兄のほととぎすは

「ほつちよん(庵)かけた、おとうとごつて、おとうとごつて。」

と、血をほつちよんな思ひをこめて、夜とおしなつちよつたつていふ。

どや、ほととぎすのなまぎ(昔原)をきくとあるやろが。ようきつてみて。そないつてなつてなつちよん(庵)をきくとあるやろが。あつていふ。

②② ぬすつととお地蔵さん（岩壺）

むかしあるところに、ひとりのぬすつとがおった。ある晩、人の家、どろぼうにはいつて、ぬすみだしてきた金を、村のお寺のこんもりしげった森のなかにある、お地蔵さんのところへかくした。

かくしてから、ひよいとお地蔵さんの顔をみると、いつもは「ここに」ってやさしい顔をしているのに、おそろしい顔をして、ぬすつとをにらみつけていた。

ぬすつとはびっけりして、それでもおどかすように、

「だれにも、かくしたことをしゃべるなよ。」

と、いった。

すると、お地蔵さんは

「わしはしゃべらんが、お前こそしゃべるなよ。」

と、いった。

ものなどいうはずのない、お地蔵さんのこえが、たしかにはっきりときこ

えてきたので、ぬすつとは気味がわるくなり、いそいでその場をたちよった。家へかえってねたが、お地蔵さんのことが気になって、どうしてもねむられなかった。

とうとう一晩まんじりともしないで、夜のあけるのをまつと、いそいでぬすんだ家へいつて、自分のしたことを白状した。

なんだか、そうしないではいられなかったのである。

そしてその家の人をつれだつて、金のかくしておいたお地蔵さんのところへきて、そつとお地蔵さんの顔をみると、お地蔵さんは、いつものように「ここに」したやさしい顔をしていたので、ぬすつとはほつと安心した。

そんなことがあつてからぬすつとはびたりとぬすつとをやめて、とてもまじめな人間になつたといふことである。



22 きつねつきばあさん（今木）

今でもそんなことはもうなかったが、むかしは、きつねつきやうつ、きつねが人間についてひどくおそろしさをしよるころが、ようあったもんや。わしのじいものじいんにも、じいさいいんなことがあった。

ある日のゆうぐれ近くの山、山のみもとにあったわしの家の前へ、おとみばあさんがぴよぴよと歩いてきた。よう知つてるばあさんやから、よびとめて、まあはひいなどいって家のなかへはいつてきた。けどもどつもどつものばあさんといつて、なんやらじつと家の者の方をみつておかしいと思うたんやが、まあ心安うしつたもんやから、今晚はゆくり泊つていきつて風呂に入れた。それからごはんを食べさせ、ねまをしいてやつてねかせた。ところがひいといとみると、ねまの上におきあがつて、窓の方をじつとみとる。なにとんね、おばあさん、はよねやんかといつて、ねかせると、ほんのすこしだけねるが、またおきて窓をながめとる。そのうちに便所をかしてくれといふので、便所へ案内してやつた。ところがいつまでたつても、

ていふので、どないしたのかと思つてみにいくと、おらん。便所の窓が、がらつとあけられている。どうやらそこから外へでていつてもだらしいのやが、あんなおばあさんが、どないしてあんなところからでていつたのが、ふしぎでならなかった。

朝になつて家の者がみんな、どこへいつてもたんやろかと思つて、山の方をみると、山のはらをおばあさんが歩いておるのがみつかった。それでとんでいつてみると、おばあさんは、着物のすそはぼろぼろにやぶれ、からだじゅう血まれになつて、ぼやつとしておる。それであつて家へつれもどすと、おばあさんははうようにして家へあがりこみ、火ばちにあたつておる。からだのあてをしてやり、あたたかいものがゆをつくつてやるよ、おばあさんは、よろこんで食べ、それから、もういぬわといつて、おれいをいつてかえつていつた。

どうやらゆづべは「晩中、山のなかを歩きまわつておたにちがないが、あのおかしな目つきからかながえてみたら、きつねでもいつたのどちがうやろかと、みんな話しあつておつた。

するとそこへ村の人が走ってきて、おとみばあさんが、山のむこうの道でたおれて死んだと知らせてくれたので、びつくりしてみんなでそばへ走っていった。なんでもそうなたかしらんが、大人の人がみんなをよびにいった。あいだ、まだ子どもやったわしが、死んだおばあさんのそばでみはりをしておったが、おばあさんの顔がきつねにみえ、いきなりたちあがつてきはせんかと、ぶるぶるぶるぶるおったもんや。このおばあさんも、きつねにつかれてとうとうこんなことになったんやと、あとでみんなは話していたが、ひどいことをしようたもんや。そんなことがほんまにあるんやったら、今もあるはずやのに、このころそんなことがでんのうなるとこみたら、きつねうまぢゆうもんも、ほんまにきつねのしわざとちがうちゆううまぢゆうもんになるわけやが、そんなら死んだおとみばあさんは、どないしてあないなつたのか、じいさんにわしがこの目でみとるだけに、とんとわけがわからんことになるわい。



24 おいの池の話 (佐名伝)

いつのころかははつきりせんが、ずっとずっとむかしのことや。

村の百姓嘉兵衛に、おいのという気立のやさしい、きれいな娘がおつたそうじゃ。はやく母親を失ってから、一家の女仕事は一手にひきうけ、からだの弱い嘉兵衛をたすけて、田畑の仕事の手助けもするちゆうしつかり者でう、近在近郷から、嫁にほしいといいつてくるものも、いっぱいあったそうじゃが、おいは、また早い早いといいつて、ことわりつづけてきたそうな。

ところが、ある年のくれのゆうがたのことじゃ。おいは、父の用事で近くの町までいってきや、とうぶりくれてかえってきたのやと。そして、村の入口にまつてある地藏さんの前まで帰ってくると、そこにはうずくまつて痛かっているひとりの若い男をみつけた。近づいてみると、すみぞめの衣を着た僧で、にわかな腹痛で、苦しんどつた。

そこからおいの家は、そんなに遠くなかったので、おいはその若い僧をせおうてうちへ帰っていった。それから父の嘉兵衛といつしよに、薬をのませ

てやったり、腹をおさえてやったり、いろいろと手をつくしてやったり、やが、その甲斐があつて、その夜おそく若い僧の病気は、うそみたいにようなつてんと。

「かたじけのうございませす」

と、若い僧は、眼に涙をえ濁しながらいうた。

「わたしは、南都興福寺で学問をつづけている俊海という者、いささか所要あつて吉野山に立ちよ、ここから高野にでようとしての道すがらの急病、おかげさまで、一命をすくつていただきました。この御恩は、生涯決して忘れません。が今は、修業の身、いつの日にか必ずおむくいいたします。」

おいのは、うすぐらいあんどんの灯のもとで、初めて若い僧のひきしまつた顔を見て、生れてはじめてのはげしい恋心をもち、その晩一晩まんじりと眠れなかつたのじゃと。

あくる朝早く俊海は、いくたびも礼をのべ別れをおしんで修行の旅に出立してしもうたが、いったんおいのの心についた火は、どうにも消すことがでまらず、いよいよ燃え立つばかりだつたそつうな。

その日からおいの様子が、みんながびつくりするほどかわつてしまつた。あかるかつた顔がくらく思ひにふけり、いつも川のほとりにあるひょうたん池のかたわらに立つて、ぼんやりとしていたり、さめざめと泣いていたりしたのじゃそつうな。嘉兵衛はそれがなによりも心配だつたが、どないしようもない。

その年もくれて、新しい年の正月も終りに近い雪のふりしきる日、南都興福寺の猿沢池畔の坂道を、ふかいまんじゅう笠をかむたみすぼらしい若い娘が、のぼつていった。二月ばかりのうちに、狂うような恋心にすつかりやせたおいのである。娘心のひとすじに俊海を興福寺にたずねてきたわけよ。

山坊を訪ねて面会を求めると、俊海はおつた。命の恩人なのでよろこんで迎えてくれたが、おいのは、ここでは話もでけんからというて、五重の塔の下の人気のない雪の木かげへきてもらい、そこで燃ゆるような恋心を必死になつてうちあげたのじゃと。

びつくりしたのは俊海じゃ。

「なにをおつしやいます、おいさん、わたしは、ごらん通りの修業僧、御

恩は忘れませんが、あなたのお心にはそうわけにはいきません。おゆるしください。」

と聞いて、すがりつくおいの手を振りほどいて寺門深くかけこんでもうたそうな。

死をかけてのおいの願いが、そんなふうにつめたくはね返されたので、あいかわらずふる雪の中を、よろめくように、おいのは村までかえってきたが、それから二日あとの朝、一通の遺書をのこして、ひょうたん池の青黒い水の底に沈んでいるおいの姿がみつげだされたんじやと。遺書には、俊海に対するひとすじの恋に命を絶つということと、先立つ不孝を心からわびてあつたそうじゃ。

ところが、そんなことがあつてから数日後、南都の興福寺にいた俊海が、なんの気なしに猿沢池のとこへおりてきて、ふとみると、池の面にこのあいだみたおいのまんじゅう笠が浮んでいるので、はつとおどろいたという。そらびっくりするわ。笠をひきよせてみると、笠の裏に「おいの」と書いてあるからまちがいはない。「一体どうしてこんな笠が浮いていたのだろうか

と俊海が不審に思っているとき、後からその肩をたく者がおつた。一人娘の切なる恋を、娘にかわつてせめて一言だけ俊海に伝えてやりたいという親心から、はるばるやつてきた嘉兵衛だった。

俊海は、その顔をみると、

「あつ、嘉兵衛さん、おいのさんは」

と、聞いた。

「はい、あなたを慕つて、このあいだ村の池に身を投げて死にました。」

「えう、それでは、この笠は？」

その笠をみるなり、嘉兵衛もびっくりして

「あ、これは、たしかにおいの笠、どうしてこんな」

と不思議そうにきいた。

むかしから村のひょうたん池と奈良の猿沢池とは、底の方でつづいている。そのためにひょうたん池の堤に立つて、強く足をふむと、下が穴洞になっているのが、つづみをうちならすような音がしたので、村の人たちはそれを「つづみが芝」と呼んでいた。いいつたえの通り、これは地下をつなぐねと空洞

が通って二つの池をつないでいるものにちがいが無い。身投げの折、ひょうたん池に投げこまれた笠が、恋しい俊海への情をこめて、地下を延々とくぐって猿沢池までたどりついたものにちがいが無いと、俊海も、嘉兵衛も思ったそうなる。ひとすじの娘の恋心のじじらしさに、そのまんじゅう笠の話をきいた村の人たちは、いずれも涙を流して同情し、それからのちその池を「おいの池」と呼ぶようになったといふことじゃ。

その池は、高い岸の上にあつて、下の吉野川の水面とかなり落差があるにもかかわらず四季いつでも、水がひあがつたためしもなく、ふえもせず、へりもせずに水位を保っているが、その池が、猿沢池とつづいていてるちゅうことば、その水位がおんなしやからだといふことがでけるわけじゃわな。ふしぎな池や。

なお、俊海はその後どうなったのかというところ、その日から、興福寺から煙のように消え去つてしまつてんと。どこへいつたのか、生きてるのか、死んでしまつたのか、だれも知らんといふことじゃ。今だにわからん。

それで村の人たちは、決して口には出さなかつたけれど俊海もまた、お

いのをみたときから、おいのの姿が心に刻みこまれていて、そのために姿を消して、きつとどこかで、おいのの後を追つて死んでしまつてるにちがいが無いといふあつておつたが、もちろんほんとうのことば、なんにもわからん。



おいのちゃん

昭和48年発刊の『大淀町史』では、当時、京都女子大学教授として教鞭をとられていた大学さんが「大淀町の伝説と昔話」の編集を担当し、左記を「あとがき」として記しています。

おのおの大字の、かなり御年配のこれという人に、おのおの大字に伝承されている「伝説と昔話」の蒐集をおたのみしたところ、そのほとんどの人から、それらしいものはなにもないというお返事をいただき、いささかあわてた。それであらためて、その方面に特別に興味を持っておられる若い方(浦西勉君)におねがいして資料を集めてもらい、そこへ、たとえば『大和の伝説』などにすでに記載されているものなどを加え、もっぱら紙面の都合を考慮して、伝説はこれを二〇の大字に配列、昔話はおもしろそうなものを四つとりあげて整理してみたのがこれである。したがって、伝説などにはかなり省略したこともあるが、いずれも地名のおこりといたたぐいの片々たるものであり、もともとこれなどは大字別に配列すべき性質のものでないことばかりはわかっていながら、偶然にうまくそっくりかたちにとまるといっわけである。いつまでもなく「伝説や昔話」といったものは、その地域の環境なり文化なりを反映しながら、庶民たちのあいだからいつとはなしに発生し口承されてきたものであるわけだが、まとめてみて率直な感じは、本町など古い歴史にめぐまれた土地であるにもかかわらず、そうしたものの伝承がどうして

こんなにも貧困なのかということである。もともとあつていいと思われるものが、事実ないというおどろきと、あつてもあるものは内容的について、他の地域にあるものと同類型のものが多く、この土地に密着した独自のものもあつたものが、すくなくすきるといふさびしさである。はじめからなかったのではなくて、土地柄からいつあつたことにまちがいはないと考えられるが、それがとくに御年配のこれという人におたずねしても、なにもないとおっしゃるといふことは、すでにさういふものがこの土地から、あとかたもなく消滅してしまっていることを物語っているものだろうか。それはたしかに、すてておけばそのまま消滅していく性格のものではあるが、だからといってそれをその性格のままに消滅させてしまったとすれば、それは郷土愛の基盤となるさういふものの貴重さを認識しない土地の人たちの怠慢といわなければならない。それは消滅させてはならないものであり、そのためにも今度のこつという蒐集の仕事は大きな意義をもっているものといつていいと、ほんのべき土地柄を思つと、決してあとかたもなく消滅してしまつていくものではなく、かならずどこかにまだまた埋没されているにちがいないと思われるわけで、こつした機会をしておにあらたな認識をもつていただいて、その発掘の仕事にこつでの協力をのぞまずにはいられない。

(花岡大学)

今こそ「百羽のツル」を

「百羽のツル」は、花岡先生が生前に書いた児童文学の傑作。知られる児童文学作家、花岡大祐（1909〜88年）の生誕110年を記念してイベントが、ひかりの地・大淀町の和文記念館で開催される。その人物や想いを、花岡が創立した大淀高校の校同世代に敬意を捧げた「百羽のツル」展を開催する。

児童文学作家 花岡大学生誕110年 今月朗読や劇



大淀町立図書館に飾られている花岡大学コーナー。花岡先生の生誕110年を記念して、花岡先生の手記や原稿、花岡先生と大淀町校同世代の交流の歴史をまとめた「百羽のツル」展を開催する。

「百羽のツル」は、花岡先生が生前に書いた児童文学の傑作。知られる児童文学作家、花岡大祐（1909〜88年）の生誕110年を記念してイベントが、ひかりの地・大淀町の和文記念館で開催される。その人物や想いを、花岡が創立した大淀高校の校同世代に敬意を捧げた「百羽のツル」展を開催する。

花岡先生は、大淀町立大淀高校の校長を務めた。その人物や想いを、花岡が創立した大淀高校の校同世代に敬意を捧げた「百羽のツル」展を開催する。花岡先生は、大淀町立大淀高校の校長を務めた。その人物や想いを、花岡が創立した大淀高校の校同世代に敬意を捧げた「百羽のツル」展を開催する。

花岡先生は、大淀町立大淀高校の校長を務めた。その人物や想いを、花岡が創立した大淀高校の校同世代に敬意を捧げた「百羽のツル」展を開催する。花岡先生は、大淀町立大淀高校の校長を務めた。その人物や想いを、花岡が創立した大淀高校の校同世代に敬意を捧げた「百羽のツル」展を開催する。

花岡先生は、大淀町立大淀高校の校長を務めた。その人物や想いを、花岡が創立した大淀高校の校同世代に敬意を捧げた「百羽のツル」展を開催する。花岡先生は、大淀町立大淀高校の校長を務めた。その人物や想いを、花岡が創立した大淀高校の校同世代に敬意を捧げた「百羽のツル」展を開催する。

2019年11月8日(金) 朝日新聞

花岡大学の童話 多様に表現

大淀で10・17・24日、朗読・討論・舞台など

大淀町出身の児童文学作家、花岡大祐（1909〜88）の代表作「百羽のツル」でパフォーマンスが10、17、24日、同町校同世代の町文化会館で開かれる。花岡の生誕110周年記念。短編童話を五感で味わう企画だ。



「百羽のツル」は、越冬をめざすツルの群れの物語。例を内緒に朗く。次に手紙通読で、最後は部屋を暗くして声だけで味わう。大淀町の会社が開発した知育プログラム「ラキエ」で100羽のツルを組み立てて、展示する。17日は童話の感想や意見を交わす。コーディネーターはエッセイスト川村優理さん。24日は、あらかしホールで朗読劇「ツル」になる。パフォーマンスは、あらかしホールで朗読劇「ツル」になる。パフォーマンスは、あらかしホールで朗読劇「ツル」になる。

あとがき

花岡大学生誕生110周年記念事業では、「百羽のツル」の作品を介して色々な試みを多くの方々の熱意とご協力により実施することができました。かわわってくださった皆さまに感謝申し上げます。特に、貴重な資料を寄贈くださった浄迎寺・花岡家様、本冊子の毛筆による「百羽のツル」に関して、私どもの無理なお願いにも、お役に立つのならと快くお引き受けくださった本町在住の書家・西浦雪華先生。ありがとうございました。

朗読ボランティア「響」と手話ボランティアのコラボレーション、点訳、おおよど語り部の会の紙芝居、ご自身が大学さんのファンであり、大学さんと非常に親しかった作家・川村たかしさんがお父様である児童文学作家・川村優理さんのお話と意見交換。教鞭をとられた高校時代の教え子のみなさんの先生の印象。お孫さんからみたおじいちゃんとしての大学さん等々、有意義なひとときを共有する機会となりました。ツルになるパフォーマンスでは、あらかしステージオペレータークラブのみなさんが町文化会館あらかしホールの舞台に、「百羽のツル」の冒頭「つめたい月の光でこうこうと明るい夜ふけのひろい空でした。」をイメージして満月を出現させ、パフォーマンスにとってもマッチした演出となりました。知育ブックで作った満月とツルのオブジェは表情豊かに展示することができました。

また、本冊子にある前田晃宏さんの作品で製作したメモリアル動画絵本「百羽のツル」は you tube で配信し、多くのみなさまのもとに届けて参ります。

何より今回の「百羽のツル」が大きく羽ばたき、多種多様な表現で受け継がれ、誕生120周年につながればと願っています。これからも本町の取り組みにご支援ご協力いただきますようお願いいたします。

2019年11月

大淀町教育委員会文化振興課

(文責 種田知子)



花岡大学生誕生110周年記念事業 みんなあつまれ！「百羽のツル」でパフォーマンス ～ メモリアルブック ～

■企画・発行：奈良県大淀町

〒638-0812 奈良県吉野郡大淀町桧垣本 2090 番地

大淀町教育委員会文化振興課(大淀町文化会館内)

TEL:0747-54-2110 FAX:0747-54-2112

■発行日：2019年11月30日

■印刷：岡本印刷所

〒639-3126 奈良県吉野郡大淀町新野 342 番地

TEL:0746-32-2166 FAX:0746-32-2188



2019年11月
奈良県大淀町